

連載：研究者になる！－第17回－

フィールド科学教育研究センター・准教授
芦生研究林 林長 石原 正恵

●環境問題を考えるきっかけとなった海外生活

商社勤務だった父は転勤が多く、私も国内・海外を転々とする幼少期を過ごしました。特にタンザニアで暮らした3年間の体験から、将来はアフリカの農村開発をして、貧困・環境問題を解決したい、と考えるようになりました。高校生になって本格的に進路を決めるときには、熱帯についての研究体制が整っている京都大学を選択し、受験勉強に励みました。

●研究者の道へ

京大は入学してみると、おもしろい先輩や先生がたくさんいて、海外の課題は日本の課題でもあるということに気づきました。また、今の研究に繋がる素晴らしい指導教官にも出会えました。「～しなくてはならない」ではなく、自分の好きなように楽しく研究しよう、オリジナリティの高い研究をしよう、という先生の哲学に触れました。その結果、樹木が若木から老木までの数百年という長い一生をどう生きているのかを最初の研究テーマとして選びました。木に登って調査しながら、木は自分が生まれた場所から動けないですが、若木から年をとるまでその時々環境や目標に応じて、毎年あるいは四季を通じて少しずつ動いていることを目の当たりにしました。人間とは異なる時間軸とメカニズムで生きている樹木をもっと知りたいと思うようになりました。

その後、全国の長期森林データを解析する環境省のモニタリングサイト 1000 プロジェクトや日本長期生態学研究ネットワークなどにに関わり、海外も含め多くの森林に行き、様々な研究者に出会いました。現在は、樹木の種多様性がどのように決まるのか、多様性や樹種ごとの生態が森林全体の機能とどのような関係にあるのかについて、昔の人が集めたデータも含め統合的に解析しています。

●家族や周りの協力を得ながらの研究生活。感謝の気持ちを忘れずに。

長いポストクの期間中に結婚、出産を経験しました。結婚当初から別居婚でしたが、さすがに子どもができたので同居し、パーマネントの職についていない私が育児を主に担当すると考えていました。でも、公務員の夫からの提案で、私は研究者としての業績を積むため産休を終えると同時に研究職に復帰し、夫は育休を取り一緒に京都そして北海道で暮らしました。夫の育休が明けた後は、夫は職場のある兵庫県で子ども達と暮らし、私は単

身赴任で平日は専ら研究に打ち込み週末は家族一緒に過ごす、という別居生活が始まりました。私が芦生研究林に勤務することになった今は、長男と次男が地元の小学校に入学し、私+長男+次男、夫+三男という別居スタイルです。兄弟が離れて暮らすのは可哀そうだなと思うことはあります。育休を取り時短勤務をしている夫が職場でどう思われているのかも気になります。ですが近い将来、私達のスタイルも「特殊」でなくなる時代が来ることを願っています。

●森を見つめ、色んな人とともに、森と人との持続的な関係を創っていききたい。

世界そして日本の森は、気候変動、シカの食害、開発、管理不足など課題が山積みです。研究者だけでは解決しないことのほうが多いです。多様な分野の研究者が協力するだけでなく、産業界、行政や一般市民など様々な分野の人と協働していく超学際研究が重要だと国際的にも言われてきています。私も芦生研究林のある美山町を中心にそうしたプロジェクトを始めたところですが、意図せず、高校生のころの思いに戻ってきているとも言えます。美山町に暮らしてみて、熱い思いの方がたくさんいて、私自身が日々たくさんの方のことを学ばせていただいています。従来の科学とは異なる新しいものが生まれつつあるのかもしれない、新しい知を生みだしたいとワクワクしています。一方で、研究者が果たすべき役割とは何なのか、科学者としての責任とは、と悩むこともあります。でも、諦めずに、前向きに遠くを見据えてじっくりと進んでいきたいです。

編集後記

新年度となり、待機保育室の模様替えをしました。簡易ベッドなどの備品を新調し、新しいおもちゃも仲間入り！今まで以上に楽しく快適な空間になりました。みんなが来るのを楽しみに待っています。



Gender Equality Promotion Center

〒606-8303 京都市左京区吉田橘町
電話 075 (753) 2437
FAX 075 (753) 2436
E-mail w-shien@mail2.adm.kyoto-u.ac.jp
HP <http://www.cwr.kyoto-u.ac.jp/>